

近世西日本における遊女の動向 一下関を中心に—

お茶の水女子大学 バフヴァロヴァ・アナスタシヤ

近年、近世日本における遊郭への興味が高まっている一方、遊女の実態は一般的にはあまり知られていない。また、近世の遊女の歴史研究では、これまでも多面的なアプローチが試みられ多くの成果を上げてきたが、社会構造論と女性史・ジェンダー研究を総合した研究は不十分である。さらに、遊女をめぐる研究においては、遊女個人の自意識をうかがえる史料が不足しているという問題点が深刻であると思われる。そこで本報告では、文化10(1813)年に「きぬ」という女性の話を記録する「口上覚」について論ずるとともに、下関の遊郭・遊所に関わる史料を踏まえつつ、近世西日本における遊女の動向について検討することを目的とする。

石見国浜田出身の「きぬ」は、文化3年に当地にやってきた出職の木地挽徳兵衛と一緒に欠落し、大坂の遊所、それから江戸の吉原遊郭に売られた。その後、身請けされ、武蔵国川越しげ町で暮らすことになった。7年後に「きぬ」を身請けした人が亡くなった際、彼女は故郷に帰ることにしたが、大坂で徳兵衛に再会した。しかし今度は「きぬ」は徳兵衛が彼女を下関辺りで再び売ろうとするのではないかと疑い、徳兵衛に嘘を言って自分の身の解放を勝ち取ることができた。以上のことが史料より読み取れる。

下関は、古くから海運業の発達したエリアだったが、近世の段階においては交易や遊興などが盛んな場所として賑わっており、遊女を含む「旅人」など、様々な流動性の高い人々が行き交っていた。まず、赤間関稲荷町は、歴史が長く全国のトップクラスに位置している遊郭であり、茶屋9軒において遊女142人が生活していた。その中には、高位に当てはまる太夫、天神という遊女も見られる。さらに、遊女は遊郭の外へ稼ぎに出されたこともあったのではないかと推測できる。次に、今浦伊崎新地は、年に3回祭礼市が行われていた上に、流動する人々の生業を前提に計画したまちづくりになっていた。遊所としても全国に知られており、茶屋揚酒屋4軒、茶屋女置屋5軒、茶屋・船宿69軒、「旅人女」104人が存在したことが分かる。最後に、肥中には、垢かき女5~6人を置いている茶屋が存在し、赤間関と強い関係を持っていた。その茶屋ができたことによって肥中には寄港する廻船が増え、地元の一部の人々にとっては生活が順調になったと考えられるが、一方、遊女にとっては負担が大きくなり、辛苦が増大したことであろう。

以上のことから、「きぬ」は遊女と遊郭社会の実態を知った上で、自分が商品化された存在であることを自覚したと推察できる。さらに、多様な経験を重ねて、遊女という稼業から脱することを自ら決意したのであろう。それに対し、下関の遊女は、「きぬ」のように自分が商品化されたことを自覚していたかどうかは、史料上でははっきり分からない。しかし、「きぬ」の「口上覚」が残ったおかげで、遊女個人の自意識への想像を深めることに一歩近づくことができたと思われる。